慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	山岡亮一 福富正美訳編 資本主義への移行論争
Sub Title	
Author	中村, 勝己
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.2 (1964. 2) ,p.183(81)- 185(83)
JaLC DOI	10.14991/001.19640201-0082
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640201-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

H・ルフェーブル著　大崎平八郎訳
『レーニン――生涯と思想――』

マルクスやエンゲルスの伝記はかなり多く、メーリンクをはじめ古典的なすぐれたものが多いが、レーニンについては、権威のあるものとしては、クルプスカヤ夫人の「レーニンの想い出」やソ連邦共産党中央委員会附属、マルクス・レーニン主義研究所の「レーニン伝」などが有名である。ここに紹介を試みるルフェーブルのレーニン伝の原題は、「レーニンの思想を認識するために」（Pour connaître la pensée de Lénin, 1957）であり、すでに「カール・マルクス――その思想形成史」（ミネルヴァ書房、一九六〇年）をはじめ、幾多のマルクス主義思想にかんする研究をもって定評ある著者の力量にふさわしい労作であると思う。

訳者が「あとがき」でのべているように、本書の著者ルフェーブルは、ハンガリー動乱の際の言動によって、フランス共産党から活動停止処分をうけ、ついで一九五八年、大胆なスターリン批判によって、除名されたといわれるが、それにもかかわらず、彼のレーニンにたいする理解はなみなみならぬものがあり、その批判も内在的で充分な説得力をもっている。

つぎのような内容から成っている。

序文
第一章　レーニン主義の歴史的諸条件
第二章　レーニンの生涯
第三章　レーニンの哲学思想
第四章　レーニンの経済思想
第五章　レーニンの政治思想

三章以下が本書全体の三分の二の分量をしめ、その重要性を物語っている。すなわち第三章のレーニンの哲学思想については、(A)問題、(B)世界観としてのマルクス主義、(C)唯物論と経験批判論、(D)『哲学ノート』、(E)ヘーゲルの『論理学』に関するノートの五つの項目にわけて論じており、マルクスの史的唯物論の上に立って、マルクス主義哲学の混乱――弁証法におけるあれほどの強調にもかかわらず、論理学や方法論や弁証法にかんするまとまった論説といえるようなものは、ひとつも書きのこしていなかったというような――を整理し、レーニン主義を体系づける過程を、『哲学ノート』や『論理学』に関するノートについて観察している。

つぎに第四章のレーニンの経済思想については、(A)経済的社会構成体、(B)不均等発展の法則、(C)レーニンの経済思想と革命の三項目から成り、資本主義発展の不均等法則の把握から、はじめは、少数の資本主義国で、あるいはただ一つの資本主義ででも可能であるとする一国社会主義の理論が導き出されることを強調している。最後に第五章のレーニンの政治思想においては、プロレタリアートの独裁の理論のロシアにおける具体化について克明に分析している。レーニンの政治思想は極度に確乎不抜なものであると同時に、驚くべき柔軟性をもっている。原理においては確乎不抜であり、その適用にあたっては柔軟であった（三二五頁）と著者がのべているように、レーニンが社会主義革命達成におけるプロレタリアートの階級的本能や彼らの自然発生性を重視すると同時に、ブルジョア・インテリゲンツィアの高度の政治意識（「近代の科学的社会主義の創始者であるマルクスとエンゲルス自身も、その社会的地位からすれば、ブルジョア・インテリゲンツィアに属していた」）との有効な結びつきと、小ブルジョア大衆すなわち広はんな農民層をプロレタリアートの周囲に結集させるためのレーニンの努力について語っている。レーニンによれば、理論と実践における統一が、よってもって支えられるところのものは、第一にはプロレタリア前衛の自覚によってであり、革命にたいする彼らの献身、彼らの忍耐、自己犠牲、英雄精神によってであるが、第二に党の活動を可能にするものは、《プロレタリア的な勤労大衆と、しかじまた非プロレタリア的な勤労大衆とも結びつきを保ち、彼らと接近し、そう言いたければ、ある程度まで彼らと溶けあう能力》であるというのであるが（四二七頁）、要するにルフェーブルは本書において、まさしく、《未曾有のくるしみと犠牲、比類ない革命的英雄精神、信じられないほどの根気とひたむきな探求、学習、実践による試練、失望、点検、ヨーロッパの経験との比較の半世紀》ののち、ロシアの大衆がマルクス主義を理解し、真の革命理論として学びとった過程を、レーニンの生涯と思想を分析するなかで追求しているということができる。簡単な紹介では、到底つくすことができないが、最近における真によみごたえのある研究のひとつである。（ミネルヴァ書房・一九六三年刊・B6・四七八頁・九六〇円）

―飯田　鼎―

＊　＊　＊

高須裕三著
『福祉国家の動向』

この本の一番いい点は、あくまでも実証的に、社会保障の意義を追求していることである。

「福祉国家」というテーマは、しばしばイデオロギーとしてとりあげられ易いが、実は社会保障の生みだした、きわめて経験的な果実である。氏はこのことに着目し、独自の社会保障論を展開する。従来、社会政策・社会保障は、資本主義の労働力保全として、労働力の維持培養のためにおこなわれるものという見解があったが、現代の社会保障はもはやその対象を組織労働者に限っている。これは明らかに大衆社会における国民各層の実力化である。しかも医療保険も現金では浪費されるおそれがあるので、現物給付としているため、そこには金銭勘定を越えた倫理的要請が付加され、生存権原則実現の推進力になる。ここに年金給付のごとく骨抜き的圧縮はなく、常に予算以上に保障が実現されていく。

氏はこのような観点から、福祉国家を、団体的平等主義の第一段階から、個別的自由的要素を加味した第二段階に進むものとする。欧米の豊富な実証とあいまって迫力のある書である。因みに氏は昭和十六年本塾を卒業、現在、日大教授である。（誠信書房・A5・二四〇頁・七五〇円）

―加藤　寛―

＊　＊　＊

山岡亮一・福富正美訳編
『資本主義への移行論争』

本書は「封建制から資本主義への移行」の問題を扱ったソヴィエト歴史学界の動向を伝える論文八編を選び編纂したものである。

第I部の第一～三論文は故コスミンスキーの筆になるもので、第一論文「一三―一四世紀のイギリス農村における階級闘争」は、近時注目されているアメリカの社会学者ホマンズの著書「一三世紀のイギリス村落民」The English villages in the 13 th Century, 1942をとりあげ、「諸世紀のなかでもっとも偉大な世紀であった一三世紀の「均衡」と「安定性」の破られたのは、「中世的宗教と道徳の堕落」という社会の「疾病」によるとするホマンズ社会学の反動性を批判し、ドッブ「資本主義発展の研究」やヒルトンの諸研究をこれと対比し、「均衡」し「安定」せる封建制の内部矛盾と崩壊の経済的原因を紹介している。ドッブのいう農民経営の「牧畜型」と「農業型」、

賦役と雇用労働の比重の問題、ヒルトンのいう南部及び東部の「典型的」な大規模な教会領からの「諸偏差」――「直営地経営がわずかしかおこなわれず、賦役制度の発展が弱く、貨幣地代が優勢であり、雇傭労働が大きな役割をはたしている中規模ならびに小規模の封建的領有地が優勢である」レスターシャーの諸マナーでは、「農民的所有の移動と集積、農民層の階級分化、しだいにジェントリーの地位に移行しつつある農民層の上層部の分離、経済活動からの封建領主の疎遠化というような現象がまりいっそう明瞭にみとめられる」という指摘は、我が国でもいち早く消化されている事実である。第二論文「一四世紀ならびに一五世紀はヨーロッパ経済の衰退期であったか」は第一〇回国際歴史家会議における報告で、いわゆる「衰退」とか「沈滞」の内容が、国又は地方・産業・階級により多様である事を指摘しつつ、「ヨーロッパ経済の衰退現象が、当時支配していた生産様式の歴史的運命や、所有の配分と性格とにおける変化や、諸階級の相互関係および階級闘争……ふるいものの衰退とあたらしいものの成長としておこなわれるところの進歩の指標ではなかろうか？」（邦訳六一頁。傍点引用者）という問題を提起して、ある程度の見透しを述べている。この問題はポスタンの著名な短編「一五世紀」においても、不明瞭ながらも提起されているが、本論文末尾（邦訳六八頁）は見事な手法を示している。ケム教授の「イギリス封建制度の特質」を批判した第三論文中、中央集権国家であるという事が、イギリス封建制の崩壊＝資本主義の成立にどの様に有利に作用したかという点の指摘（八二頁以下）は興味深い。「一四―一五世紀におけるいわゆる『封建制度の危機』について」においてバルグはW・アーベルやM・M・ポスタンの業績をとりあげ、人口増減→穀物市況の変動という線で封建危機を説明する誤謬を批判し、「危機」の中に衰退と前進の反映を見出すべきだとする。（一二二頁など）。

第Ⅱ部のスカスキン「西ヨーロッパ農業における資本主義発生史の問題によせて」およびラヴロフスキー「西部ならびに東部ヨーロッパ諸国における原始的蓄積の問題によせて」は、資本主義発展の「二つの道」に関する論文である。農業における資本主義の「プロシア的な」道と「アメリカ的な」道と、「イギリス的・フランス的変種」の道の「三つの相異なる道」（一五三頁以下。傍点引用者）とはどういう事なのであろうか。コルホフ「封建制度から資本主義への移行にかんする討論」は最も内容豊富で興味ある論文であって、例のドッブ・スウィージー・ヒルトン・高橋幸八郎氏らの「移行論争」を論評したものである。コルホフは概してスウィージーに反対する立場に立ってはいるが、「買占人・商人に従属する手工業生産」や「大規模な集中マニュファクチュア」や「国家的強制措置の役割をあきらかに過小評価」するドッブ特に高橋幸八郎氏の見解に明白な疑問を表明している（一八六頁）。「ヨーロッパ諸国において到達された社会的分業の度合によって条件づけられた商業の一定の発展水準」「商業の発展は、社会的分業の成長によって条件づけられたものであり、これは、社会的分業が現象する経済的形態である」（一九〇頁。傍点原著者）とかれがいう時、「貿易仲介人としての商人の専門活動が、窮局において交換の発展と、――それとともに――社会的分業の発展とをよびおこした。」（ピレンヌ）のではなく、「このような考えに反駁する路線」すなわち「分業の成長は、社会発展のもっとも強力なてこの一つであった」という時、かれは問題の所在をほりあてかけているのではないか（一九〇―一九一頁）。「労働生産性の上昇をめざす直接生産者自身の志向」「農民および手工業者自身の経営上の創意性と生産活動の成果にたいする関心こそが、封建制度のもとにおける経済的発展の基本的な推進力、『第一の原動力』なのである」（一九六頁）という観点を、「生産技術における諸変化」（一九八頁）という観点によって混乱させなければ、コルホフ論文は中々示唆にとむものといえるであろう。巻末のスカスキン「西ヨーロッパにおける絶対主義の問題」は「ブルジョアジー」という極めて不明確な概念を明確に規定する必要がある。

全体として本書はわが国の西洋経済史の研究にとって、部分的に興味ある論点を含むとはいえ、決定的に重要な、まあたらしい論点を有しているかどうか疑わしい。（三一書房刊・B6・二三七頁・六五〇円）

―中村　勝己―

＊　＊　＊

副島種典編著

『ソヴェト経済の歴史と理論』

第二次世界大戦後、世界経済の上で領域、人口に大きな比率をしめ世界市場を二分して来た社会主義経済の発展は目覚しいものがある。一国社会主義として展開したソビエト経済に対して新たに現われた社会主義経済群は、中国の主張する「多数社会主義国統一の原理」をみるまでもなく、様々の角度から社会主義経済を貫ぬく法則性の体系化に新しい問題を提起しつつある。このような時期には、その〝先進国〟としてのソビエト経済の発展とその内蔵する諸問題の理論的整理と位置づけを行うことが不可欠の要請となる。本書はまさにそのような要請に答えているのである。

内容は二部にわかれ、第一部は一九一七年ソビエトに社会主義経済の確立する以前から、国民経済の復興までを富岡裕氏、社会主義的工業化の展開と農業集団化への着手から社会主義的改造の完了、第三次五ヵ年計画への着手までが岡本正氏、戦時経済から平和経済への切替えから物価引下げとルーブリの金建制への移行、国内体制の編成替え、スターリン体制からフルシチョフへ、農工業の一層高い目標への発展までが副島種典氏の分担となっている。

この歴史の部分での特徴は、従来陥りがちであった政策＝方針面からの〝あるべき方向〟の解明をさけ、事実をそのまま克明にあとづけて理論的整理を与えると同時に、現在社会主義経済学としてもソビエト経済論としても問題になるべき箇所を重点的に扱っている点で、単なる歴史ではない。

第二部は社会主義の経済理論と銘うたれ、Ⅰ、社会主義的価格決定のメカニズム（原価計算。同種生産物の生産「原価」水準間の格差の原因。単一「価格」と格差「価格」。農産物価格。卸売価格と小売価格）が藤田整氏、Ⅱ、「投資効率」の諸問題（投資効率の絶対的指標。投資の相対的効率測定。国民経済バランス理論との関連、及びそれらをめぐる論争）が望月喜一氏、Ⅲ、国民経済バランス論、中野雄策氏となっており、取上げるべき問題は余りに多いがここではふれえない。

副島氏の下、斯学界中堅若手第一線による、社会主義経済学の当面する課題のソビエト経済に密着した理論的展開乃至整理は、今後この分野での討論の進展に大いに寄与すると同時に、分野の外の人々に社会主義経済理論の理解を効果的にすすめるであろうことは疑う余地がない。これにひきいれられた読者が、たとえば五八年の、スターリン体制の変革につらなる管理組織の改正、農業制度の根本的改革がなぜ、そしてどのように実現したか、その時の重要なポイントである「価格」が、社会主義経済の価格論からどう説明されるか、又投資効率論と価格論の関連、など、現象の理論的整理と理論の進化のつながりを求めて立ちどまったとしたら、それはまさにその読者がそこから出発すべきなのである。

（日本評論新社・一九六三年一〇月刊・A5・三二〇頁・一二〇〇円）

―平野　絢子―

＊　＊　＊